

インテリアに使用する配色の印象評価の世代間比較

Psychological evaluation of the interior color scheme comparering between generations

横井 梓 Azusa YOKOI

早稲田大学大学院人間科学研究科

Graduate School of Human Sciences, Waseda University

齋藤 美穂 Miho SAITO

早稲田大学人間科学学術院

Faculty of Human Sciences, Waseda University

佐藤奈津子 Natsuko SATO

前田建設工業株式会社 建築エンジニアリング・設計部

Building Engineering & Design Department, Maeda Corporation

北村 和男 Kazuo KITAMURA

DNP 住空間マテリアル販売株式会社

DNP Lifestyle Materials Marketing Co.,Ltd.

大原千佳子 Chikako OHARA

大日本印刷株式会社 住空間マテリアル事業部

Dai Nippon Printing Co.,Ltd.

キーワード：インテリア配色、印象評価、世代間比較

Keywords: interior color scheme, psychological evaluation, age comparison

1.序

横井ら(2008)では、10代から30代の男女を対象とした種々のインテリア配色に関する印象評価実験の結果を報告した。本稿では、対象者の年齢層に着目し、インテリア配色の印象評価に関して世代間で比較を行った結果を報告する。

2.目的

インテリア配色パターンの印象評価において、若年者と高齢者の世代間による印象評価の差異が見受けられるか否かを探るために、若年者と高齢者を対象とし、コンピューターグラフィックとサンプル刺激を使用したインテリア配色の印象評価に関する調査、検討を行うことを目的とした。

3.方法

3.1.刺激

大日本印刷(株)社製インテリア内装材サンプルWSサブマーレの中からよく売られているとされる内装材色8色を選出し、建具と床に対して同色配色または二色配色となるように配色を施した64配色を作成した。64配色について、インテリア配色としてふさわしくない配色パターンを排除した31配色を基本の刺激とし、さらに予備実験により31配色の中からインテリア空間として好ましい配色、好ましくない配色を選出し、好ましい配色3種、好ましくない配色2種の計5種を本実験の刺激とした。使用した5種は黒(Bk)、薄茶(1tB1, 1tB2)、濃茶(dkB2)を含む建具と床の配色パターンであり、以下、Bk×Bk、Bk×dkB2、1tB1×1tB1、1tB1×1tB2、1tB2×1tB2と表記する。(建具×床)なお、使用した刺激の一覧とマンセル値をTable1に示す。また各インテリア配色に対して①大日本印刷(株)社製WSイメージパースを使用して作成した建具を中心に拡大した部分画像②部屋全体の様子が見渡せる全体画像③床材、建具のサンプルの3種の刺激を用いた。①②はA4光沢紙に印刷したものを使用した。

Table1 使用した刺激のマンセル値

		建具	床
好ましい配色	1tB1×1tB1	2YR 8.7/1	8.5YR 8.5/1.8
	1tB1×1tB2	2YR 8.7/1	8.2YR 7.6/3.7
	1tB2×1tB2	6YR 8.0/3	8.2YR 7.6/3.7
好ましくない配色	Bk×Bk	1RP 4.0/1	9.3RP 2.9/2.0
	Bk×dkB2	1RP 4.0/1	9.9R 2.8/4.1

3.2.対象者

10代から20代の男女100名(男性48名、女性52名、平均年齢は22.4歳)、60歳以上の男女82名(男性35名、女性47名、平均年齢は70.7歳)。

3.3.手続き

上記①②③の3刺激を同時呈示し、各5配色に対してSD法による7段階印象評定を行った。使用した形容詞対をTable2に示す。

Table2 使用した形容詞対

上品な-下品な	平凡な-個性的な	軽やかな-重たい
単純な-複雑な	美しい-美しくない	親しみやすい-親しみにくい
調和した-不調和な	好きな-嫌いな	広々とした-狭苦しい
明るい-暗い	センスの良い-センスの悪い	若々しい-年寄りじみた
暖かい-冷たい	男性的な-女性的な	落ち着いた-落ち着きのない

4.結果と考察

4.1.イメージプロフィール

高齢者と若年者の両者からSD法により得られた評定値平均値をイメージプロフィールとしてまとめた。Figure1には1tBが使用された配色、Figure2にはBkが使用された配色を示す。

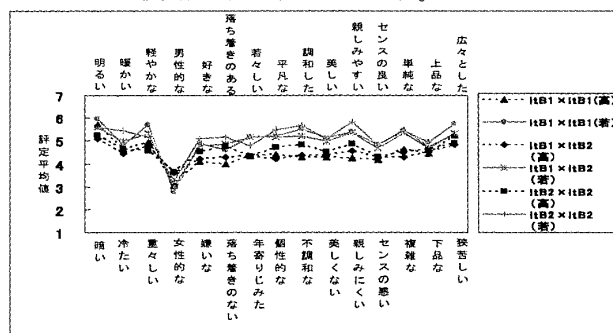


Figure1.1tB 配色のイメージプロフィール

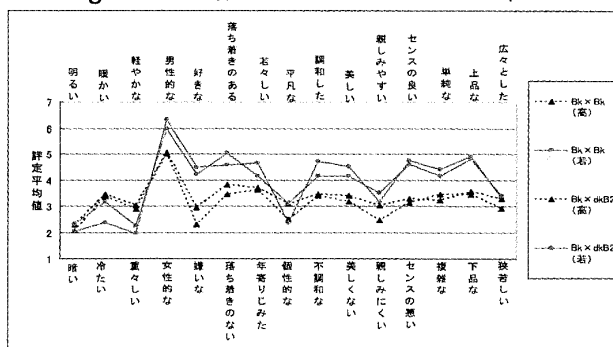


Figure2.Bk 配色のイメージプロフィール

Figure1 より、高齢者と若年者は共通して、ltB が使用されたインテリア配色に関して明るく、暖かい、女性的な印象を持つ傾向が見られた。しかし、その他の項目に関しては、高齢者の評定平均値は中央値である 4 付近であるのに対し、若年者の評定平均値が総じて高い傾向にあった。

また Figure2 より、Bk が使用された配色に関して、高齢者と若年者は共通して、暗く、冷たい、重々しい、個性的な印象を持つ傾向が見られた。しかし、その他の多くの項目について高齢者は若年者よりも評定平均値が低い傾向にあるということが見て取れる。特に、「好きな - 嫌いな」の項目に関しては、若年者に比べ、高齢者はより嫌いとして評価していることが特徴的に挙げられる。

このことから、比較的高明度である ltB 配色について高齢者は特徴的な印象を持たない傾向にあるのに対し、若年者はよりポジティブな印象を持つ傾向にあるといえる。また一方で、比較的低明度である Bk 配色については若年者よりも高齢者がよりネガティブな印象を持つ傾向にあるといえる。

4.2. 因子分析

5 刺激に対する印象評定から得られた評定値に対して因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った結果、2 因子を抽出し、「センスの良い - センスの悪い」、「上品な - 下品な」、「美しい - 美しくない」などからなる評価性因子、「軽やかな - 重々しい」、「男性的な - 女性的な」、「明るい - 暗い」などからなる軽明性因子と命名した。因子負荷量表を Table3 に示す。2 因子の累積寄与率は 59.4% であり、高齢者と若年者がインテリア空間を評価する際に、評価性因子と軽明性因子の 2 因子で約 6 割の説明力があるということがわかる。また、第 1 因子である評価性因子の寄与率は 44.6% であり、2 因子で説明される寄与率に対し、非常に多くの割合を占めていることもわかる。

Table3 因子負荷量表（プロマックス回転後）

	因子		因子抽出後の 共通性
	評価性	軽明性	
センスの良い	0.937	-0.167	0.775
上品な	0.884	-0.177	0.431
美しい	0.858	0.046	0.763
好きな	0.773	0.065	0.687
調和した	0.714	0.143	0.650
落ち着きのある	0.701	-0.129	0.420
親しみやすい	0.506	0.467	0.290
若々しい	0.479	0.107	0.460
単純な	0.323	0.312	0.629
軽やかな	-0.143	0.934	0.778
男性的な	0.208	-0.909	0.704
明るい	0.047	0.856	0.753
暖かい	-0.030	0.671	0.300
平凡な	0.030	0.663	0.661
広々とした	0.305	0.586	0.611
寄与率	44.622	14.786	
累積寄与率	44.622	59.408	

適合度 ($\chi^2=345.5$, $df=52$, $p<0.001$)

評価性因子と軽明性因子の因子得点散布図を Figure.3 に示す。各刺激の因子得点は、評価性因子に関しては、若年者では ltB が使用された配色が高得点、高齢者では Bk が使用された配色が低得点で

あった。軽明性因子に関しては、高齢者、若年者を問わず、ltB が使用された配色が高得点、Bk が使用された配色は低得点であった。このことから、高齢者と若年者に関してインテリア配色の印象評価の差異を検討する際には、評価性因子が重要な軸となると考えられる。イメージプロフィールからも見て取れたことと同様であるが、高齢者は低明度である Bk が使用されたインテリア配色に関して評価が低く、若年者は ltB を使用した高明度のインテリア配色に関しての評価が高い。一方で、高齢者において ltB が使用されたインテリア配色に関する得点と若年者の Bk が使用されたインテリア配色に関する得点は、0 付近に付置されている。このことから、高齢者は低明度のインテリア配色をより低い評価とし、若年者は高明度のインテリア配色をより高い評価とする傾向があることが示唆される。

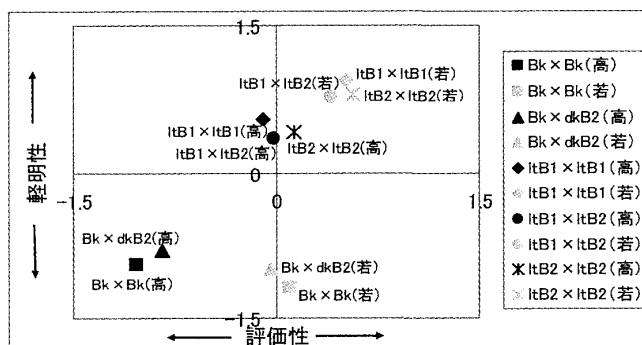


Figure3 評価性因子×軽明性因子の因子得点散布図

5. まとめ

以上の結果から、高齢者と若年者のインテリア配色に関する印象評価において、明度の低いインテリア配色と明度の高いインテリア配色での評価に差異が見られることがわかった。イメージプロフィールから、高齢者は若年者に比べて Bk が使用された明度の低いインテリア配色を嫌う傾向にあることが特徴的な結果となったが、その他の項目に関しても高齢者は若年者に比べて明度が低いインテリア配色に対してより低い評価をし、一方で若年者は高齢者に比べて明度が高いインテリア配色に対してより高い評価をする傾向にあるということが示唆された。高齢者が明度の低いインテリア配色について、より評価が低いと判断する要因として、高齢者を対象とした実験の際に、明度の低いインテリア配色はお葬式や霊安室などを連想させるといった意見も挙げられていたことが考えられる。

本実験においては被験者への負担も考慮し、5 刺激という限られた配色についての検討のみを行ったことから、さまざまな配色パターンについてさらに比較・検討を行うことや若年者と高齢者のみならず年齢層を増やした調査・検討が今後の課題である。

参考文献

1) 横井梓・齋藤美穂・佐藤奈津子・北村和男・大原千佳子 (2008) インテリアに使用する配色の印象評価 日本色彩学会誌 supplement, 32, 40-41